

### 3. 地域の避難実態（とりまとめ結果）

#### 3.4 唐丹地区 (1) 花露辺地区

##### 1) 地域の被災状況

地域名	震災前の 人口・世帯数 (平成23年2月現在)		大震災の被害		避難訓練参加者数・参加率 (平成23年3月3日実施)	
	犠牲者数 (平成25年 1月22日)	全壊・半壊家屋数 (平成25年6月現在)				
花露辺	211人	71世帯	1人	全壊22件 半壊10件	95人	45% (対象地区: 花露辺)

##### 2) 震災当日の津波避難行動実態

- ・地震発生時、海岸では作業をしていたが、お互いに声をかけ合い、軽トラックの荷台に乗り合うなどして、高台や避難場所である漁村センターに移動した。
- ・昔の消防屯所まで逃げれば安全だろうという意識があった。避難の際にも、造成地より上へ避難すれば安全であるという認識があった。
- ・家の周辺の細い通路や田畠等を通って、迅速に高台へ避難した。

##### 3) 震災以前の備え

- ・自主防災組織の設置はなかった。
- ・3月3日に実施している市の避難訓練の避難率は高かった。

##### 4) 問題点・課題の整理



4 唐丹地区

(1) 花露辺地区  
地域懇談会（2013.9.25実施）および追加聞き取り調査（2014.1.23実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

● ● ● : 津波到達範囲の境界線  
● ● ● : 津波の流れや大きさ

◆避難場所について

● ● ● : 避難場所の名称

【指定】	東日本大震災の前に金石市が指定一次避難場所としていた場所
【訓練】	東日本大震災の前に避難訓練用として利用
【当日避難】	東日本大震災の当日に避難した場所
【指定廃止】	東日本大震災のあとに指定を廃止した場所
【新指定】	東日本大震災のあとに新たに指定した場所

◆避難の様子について

● ● ● : 主な避難経路や避難の様子

◆町内会の境界について

● ● ● : 町内会の境界線  
● ● ● : 町丁目・地割の境界線

◆その他

● ● ● : 主な地域の施設など

※ゼンリン住宅地図データベース（2008年1月版）を使用して作成した

花露辺漁村センター  
(町内会仮設集会所)  
【指定】・【当日避難】

多くの人が往歩叉は車で、  
漁村センターへ避難した。

バス停付近に避難後、  
約20人の人が海の様子を見ていた。

バス停  
【当日避難】

海岸の様子を見に来を  
繰り返している人が、約10名ほどいた。

花露辺町内会仮設集会所  
【新指定】

裏山  
【当日避難】

裏山を通つて、漁村センターまで  
避難した人もいた。

上へ避難して、  
海の様子を見ていた。

明治三陸津波では、  
この付近まで津波が来たと  
伝えていた。

小島浜から津波が川のようにな  
ふだん見えない唐丹漁港の底が見えた。

0 50 100 m

4 唐丹地区  
(1) 花畠辺地区

地域懇談会（2013.9.25実施）および追加聞き取り結果に基づいて作成した。  
◆東日本大震災における津波について

◆地域懇談会（2013.9.25実施）および追加聞き取り結果に基づいて作成した。

◆町内会の境界について

◆町内会の境界線

◆町丁目・地割の境界線

※平成15年撮影の航空写真を使用



## 3. 地域の避難実態（とりまとめ結果）

## 3.4 唐丹地区 (2) 本郷地区（本郷・大曾根）

## 1) 地域の被災状況

地域名	震災前の 人口・世帯数 (平成23年2月現在)		大震災の被害		避難訓練参加者数・参加率 (平成23年3月3日実施)		
	犠牲者数 (平成25年 1月22日)	全壊・半壊家屋数 (平成25年6月現在)					
本郷 大曾根	450人	175世帯	4人	全壊49件 半壊10件		105人	23%（対象地区：本郷・大曾根）

## 2) 震災当日の津波避難行動実態

- 多くの住民が地震直後に迅速に避難した。また、家の外に出て、高齢者等に大声で避難を呼びかけた。
- 特に昭和の津波後、高台に整備された造成地より下の住民は、指定避難場所等に比較的早く、車や徒歩で避難した。
- 海側の地区では高台等に車、徒歩で避難した。
- 車で海側へ向かった方を、周りの住民が呼び止めたが、引き返さずに流された。

## 3) 震災以前の備え

- 自主防災組織は設置されていないが、町内会がその役割を果たしていた。津波災害に対する地域の意識は比較的高かった。【本郷】

## 4) 問題点・課題の整理



70~100名の避難者がいた。  
小白浜からの避難者もいた。

約40名が避難した。

約3名が避難しました。

約6名の  
講師が  
講義

大好  
避難方  
約10名

約2名が避難。

約4名が避難。

約20名が避難。

約20名が避難。

## 本郷元青年クラブ 集会所広場 [指定]・[当日避難]

約30名が避難。

約10名力が避難。

約5名が“避難。

## 【當日避難】

防災無線

# 東日本大震災検証報告書 【行動難避】編

● 津波到達範囲の境界線  
○ 日本大震災における津波について  
○ 調査会（2013.9.25実施）および追加聞き取り結果について作成した。

2. 避難場所について  
避難場所の名前  
避難場所の大きさ

東日本大震災の前に  
金石市が指定一<sup>次</sup>避  
難場としていた場所  
東日本大震災の前に  
金石市が指定一<sup>次</sup>避  
難場としていた場所

【訓練】	避難訓練用として利用
【日避難】	東日本大震災の当日に避難した場所
【定定】	東日本大震災のあとに避難した場所
【避難】	東日本大震災のあとに避難した場所

【新指定】 東日本大震災のあとに新たに指定した場所  
【既存指定】 指定を維持した場所

内会の境界について

主な避難経路や避難の様子

：町内会の境界線

：町丁目・地割の境界線

## 主な地域の施設など

## 主な地域の施設など

第2波(まつ堤防を越え、防潮町中へと押し寄せてきた。

発災時、海岸部ではワカメの水揚げやボイル作業を行っていた。

津波の引き波の音がすごいかった。

100 m



釜石市東日本大震災検証報告書  
〔津波避難行動〕編

4 唐丹地区  
(2) 本郷地区

地域懇談会（2013.9.25実施）および追加聞き取り調査（2014.1.23実施）の聞き取り結果に基いて作成した。

◆ 東日本大震災における津波について

町内会の境界について  
◆ : 町内会の境界線  
◆ : 町丁目・地割の境界線

◆ : 町内会の境界線  
◆ : 町丁目・地割の境界線  
◆ : 建物到達範囲の境界線  
◆ : 町内会の航空写真を使用  
※平成15年撮影の航空写真を使用

### 3. 地域の避難行動の実態

#### 3.4 唐丹地区 (3) 小白浜地区

##### 1) 地域の被災状況

地域名	震災前の 人口・世帯数 (平成23年2月現在)		大震災の被害		避難訓練参加者数・参加率 (平成23年3月3日実施)	
	犠牲者数 (平成25年 1月22日)	全壊・半壊家屋数 (平成25年6月現在)				
小白浜	548人	224世帯	4人	全壊82件 半壊47件	45人	8% (対象地区: 小白浜)

##### 2) 震災当日の津波避難行動実態

- ・地域には、昭和8年津波後の造成地があり、造成地を縦断する道路は、地域で「敷地通り」と呼ばれており、これより下の海岸側に住む住民の多くは、「この敷地通りまで避難すれば安心」という意識があった。
- ・今回の震災でも比較的早く「敷地通り」まで避難し、海の様子を見ていた。その後、浸水の危険を感じて、更に高台に移動した。
- ・「敷地通り」から上の住民の多くは、高台のため避難せず、自宅で様子を見ていた。
- ・海岸付近の水産加工場にいた住民・従業員は防潮堤に上がり、海の様子を見ていた。一次避難として防潮堤に上ることは、地域で習慣化していた。その後、海の様子を見ながら更に高台へと避難した。
- ・3mという波高の情報を信じ、12.5mある防潮堤は安全だと思い、そこへ避難した方が多くいた。

##### 3) 震災以前の備え

- ・平成17年10月に、自主防災組織を設立した。
- ・3月3日の避難訓練に参加するほか、特に取り組んでいたことはなかった。海側の地区では避難訓練への積極的な参加が見られたが、高台の地域では避難訓練の参加者は少なかった。

##### 4) 問題点・課題の整理

- ・12.5mの堤防や過去の被災経験にとらわれず、揺れたらすぐに高台へ避難することを徹底する。特に「敷地通り」より高台の住民についても、津波に対する意識づけを徹底しておく。







釜石市東日本大震災検証報告書  
【津波避難行動】編

4 唐丹地区  
(3) 小白浜地区

地域懇談会（2013.9.25実施）および追加聞き取り調査（2014.1.23実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

◆東日本大震災における津波について

■■■■■ : 津波到達範囲の境界線

◆町内会の境界について

■■■■■ : 町内会の境界線

■■■■■ : 町丁目・地割の境界線

※平成15年撮影の航空写真を使用

### 3. 地域の避難行動の実態

#### 3.4 唐丹地区 (4) 片岸地区

##### 1) 地域の被災状況

地域名	震災前の 人口・世帯数 (平成23年2月現在)		大震災の被害		避難訓練参加者数・参加率 (平成23年3月3日実施)	
	犠牲者数 (平成25年 1月22日)	全壊・半壊家屋数 (平成25年6月現在)				
片 岸	288人	104世帯	7人	全壊 74件 半壊 28件	43人	15% (対象地区: 片岸)

##### 2) 震災当日の津波避難行動実態

- 唐丹駅前広場は高台となっており、海の様子も確認できるため、当初、多くの住民が集まった。
- 駅前広場にも津波が来そうだったので、さらに高台に避難したが、5名の高齢者が避難の途中で間に合わず犠牲になった。
- 海沿いの危険な場所を通って指定避難場所に行くより、一旦近くの高台に逃げることが必要との認識が地域全体にあった。

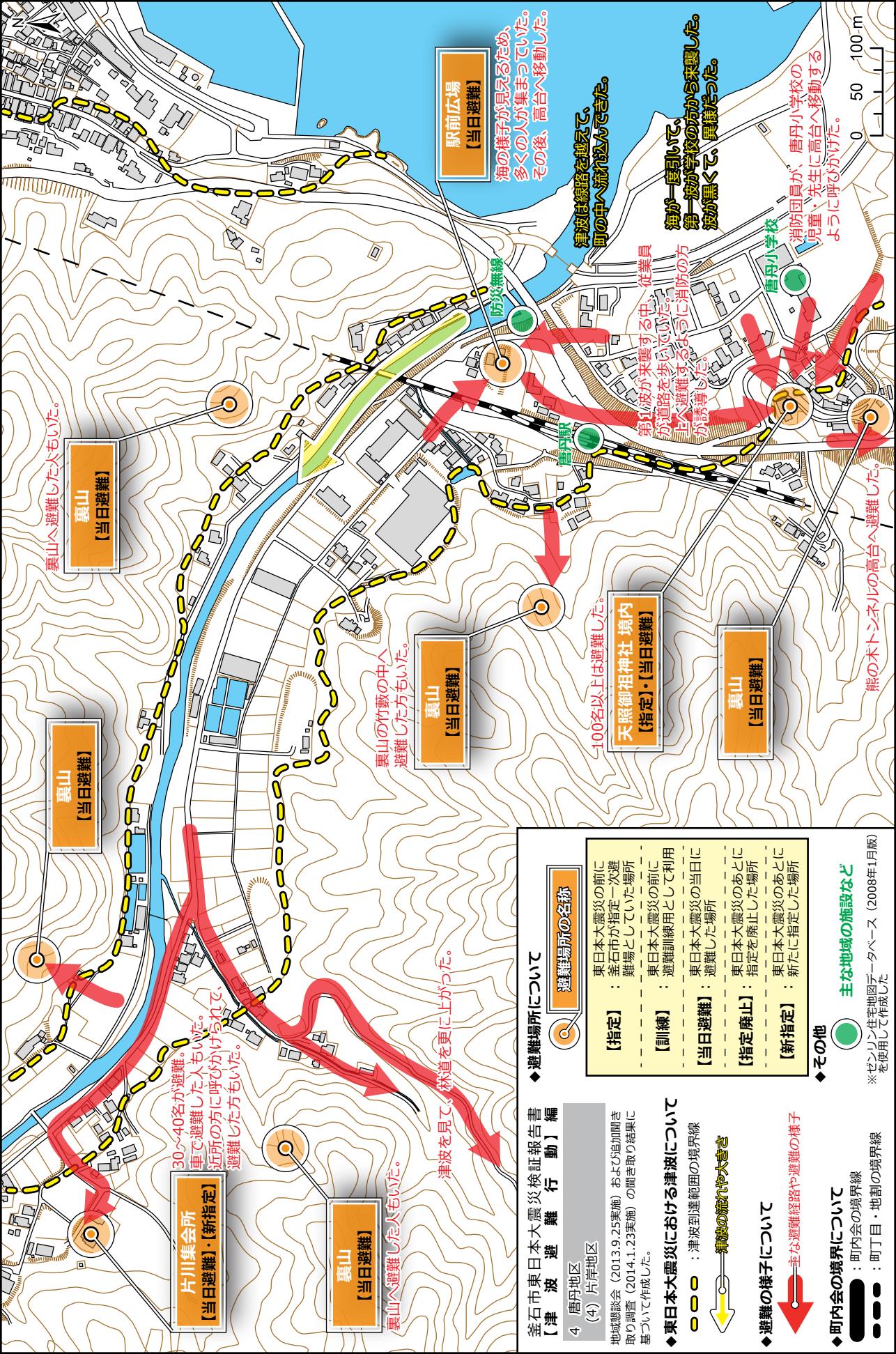
##### 3) 震災以前の備え

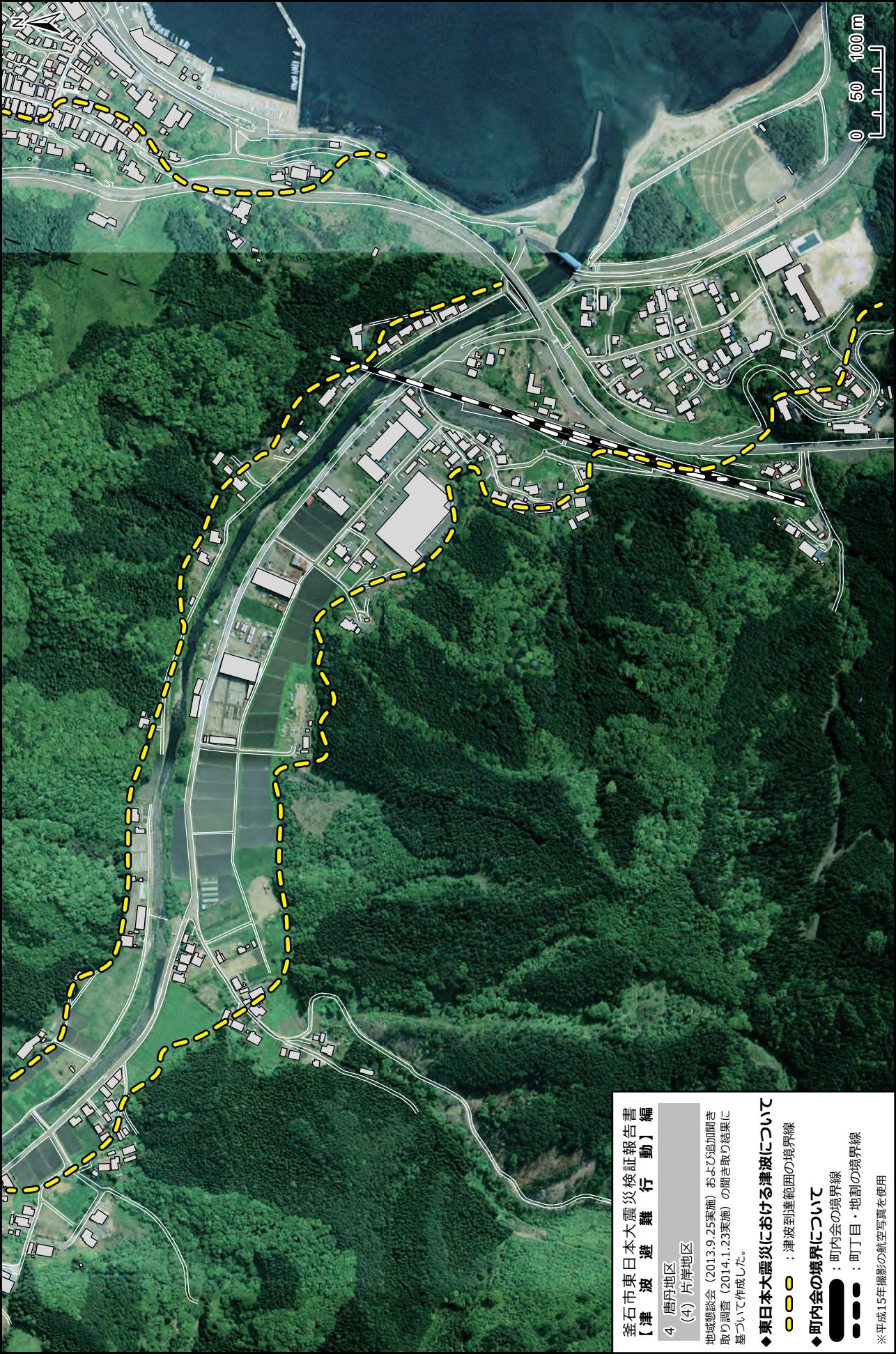
- 自主防災組織は設置しておらず、市の実施による避難訓練以外の取り組みはなかった。
- 震災の1～2年ほど前に、天照御祖神社への避難路を整備したのが功を奏した。

##### 4) 問題点・課題の整理

- 一度高台へ避難したら、そこから更に安全な高台へ避難することを徹底する。







# 【津波】東日本大震災検証報告書 編 避難行動

#### 4 唐丹地区 (4) 片岸地区

東日本大震災における津波について  
（2014.1.23実施）の聞き取り結果に基づき調査（2014.1.23実施）の聞き取り結果に基づいて作成した。

● ● ● : 津波到達範囲の境界線

## ● 町内会の境界について

### 3. 地域の避難行動の実態

#### 3.4 唐丹地区 (5) 荒川地区 (荒川・下荒川・上荒川)

##### 1) 地域の被災状況

地域名	震災前の 人口・世帯数 (平成23年2月現在)	大震災の被害		避難訓練参加者数・参加率 (平成23年3月3日実施)	
		犠牲者数 (平成25年 1月22日)	全壊・半壊家屋数 (平成25年6月現在)		
荒川 下荒川 上荒川	342人 125世帯	4人	全壊28件 半壊3件	53人	15% (対象地区:荒川・下荒川・上荒川)

##### 2) 震災当日の津波避難行動実態

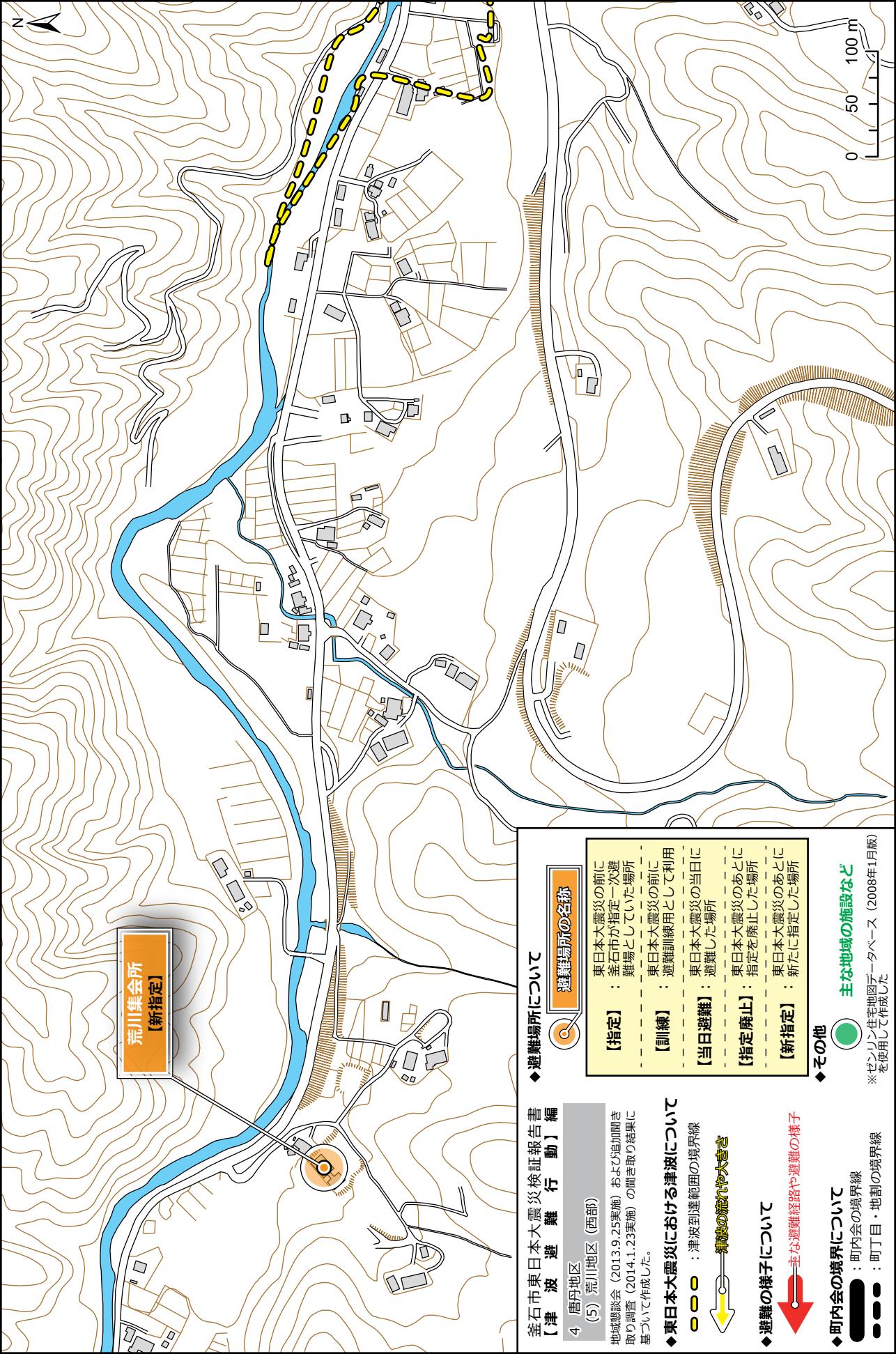
- ・指定避難場所に避難する経路が低地で、住居が危険である場合には、各自宅近くの高台に避難した。背後地が山であるため、地形的に高台への避難が容易であった。
- ・一旦、各自で高台に集まり、それから町内会長、消防、民生委員等の誘導で荒川集会所へ移動した。
- ・国道・県道等の主要道路が被災を免れたため、高台へ車で移動する方が多かった。
- ・避難を呼びかけたが避難しなかった方、一度避難したのに浸水域にある自宅に戻った方が流された。

##### 3) 震災以前の備え

- ・自主防災組織を平成9年2月に設置した。テント、毛布、小型発電機等の防災資機材を備え付けていた。
- ・町内会では、自主的に各自宅近くの高台の避難場所8か所を決め、市の指定避難場所から遠い地域の住民でも避難できるようにし、平成22年2月の町内会総会等で周知を図った。
- ・平成22年3月と翌23年3月に実施した避難訓練では、各避難場所に責任者を配置するなどの取り組みも行った。その結果、避難者数が2倍以上に増えた。

##### 4) 問題点・課題の整理







釜石市東日本大震災災害検証報告書  
【津波避難行動】編  
4 唐丹地区  
(5) 荒川地区(西部)

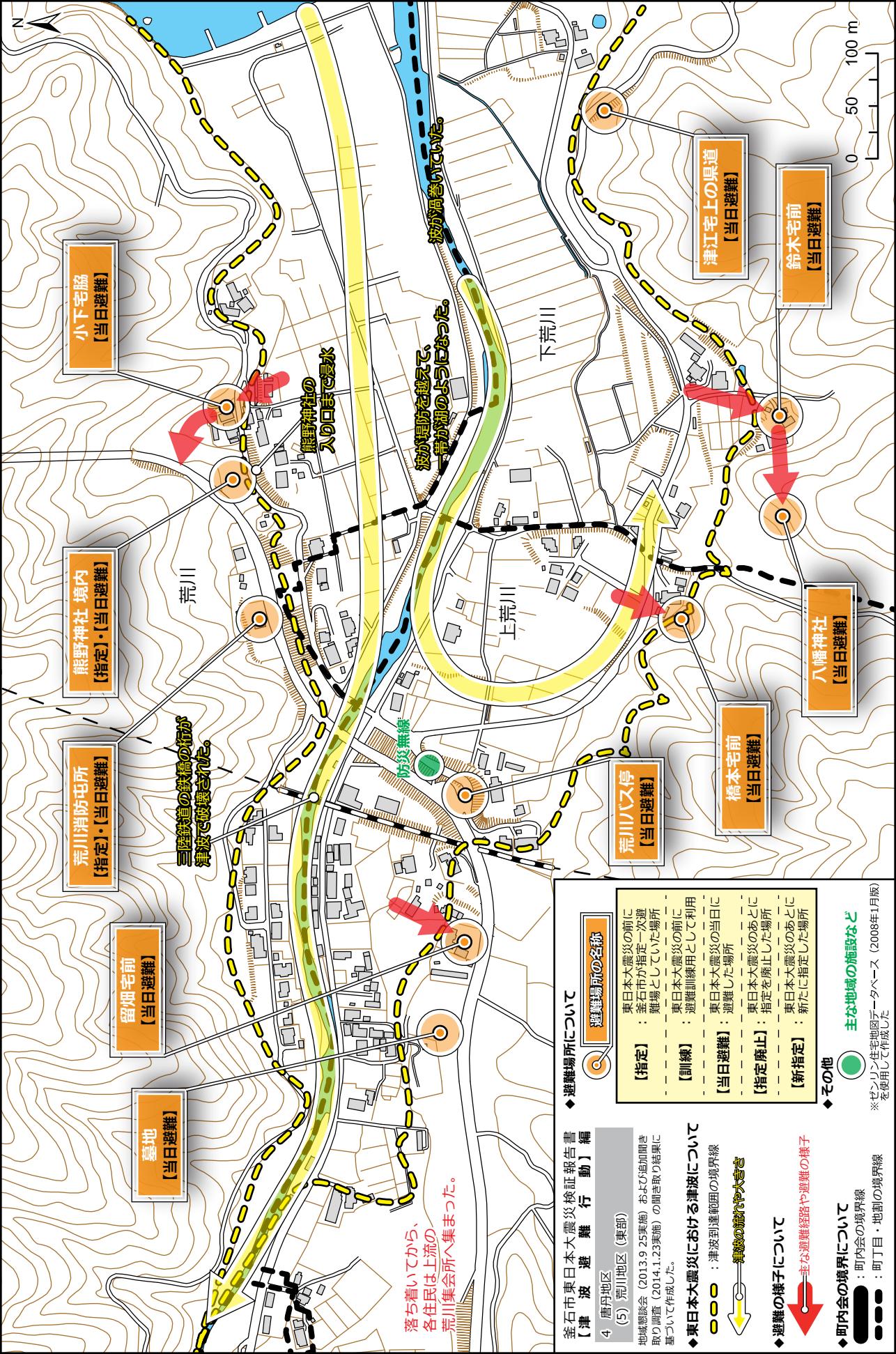
地域懇談会(2013.9.25実施)および追加聞き取り調査(2014.1.23実施)の聞き取り結果に基づいて作成した。

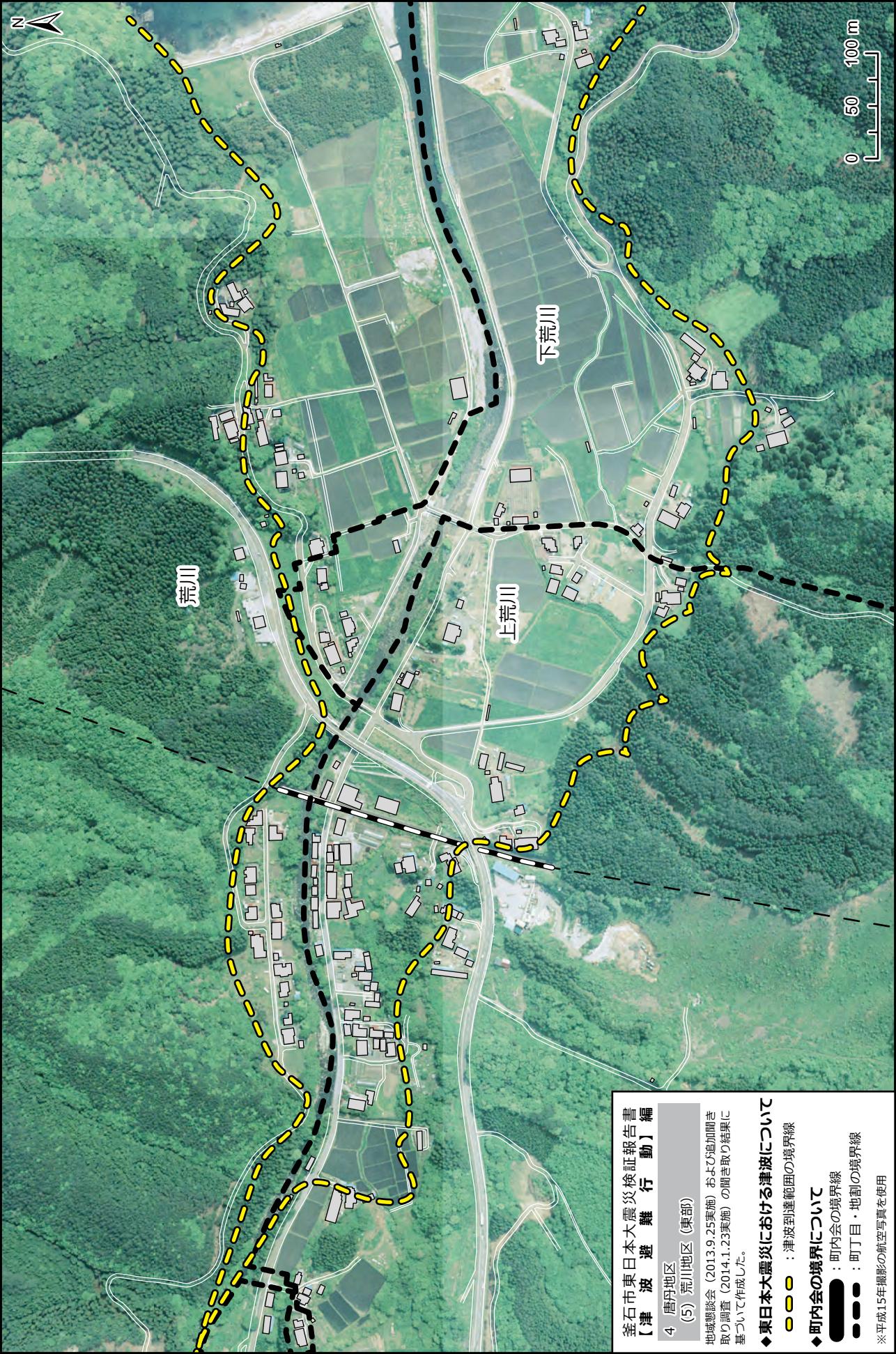
◆ 東日本大震災における津波について

◆ 町内会の境界について  
◆ 町内会の境界線  
◆ 津波到達範囲の境界線

◆ 町丁目・地割の境界線  
◆ 町丁目

※平成15年撮影の航空写真を使用





### 3. 地域の避難行動の実態

#### 3.4 唐丹地区 (6) 大石地区 (大石・向・屋形)

##### 1) 地域の被災状況

地域名	震災前の 人口・世帯数 (平成23年2月現在)		大震災の被害		避難訓練参加者数・参加率 (平成23年3月3日実施)		
	犠牲者数 (平成25年 1月22日)	全壊・半壊家屋数 (平成25年6月現在)					
大石 向 屋形	122人	52世帯	0人	全壊 12件	半壊 6件	63人	52% (対象地区: 大石・向・屋形)

##### 2) 震災当日の津波避難行動実態

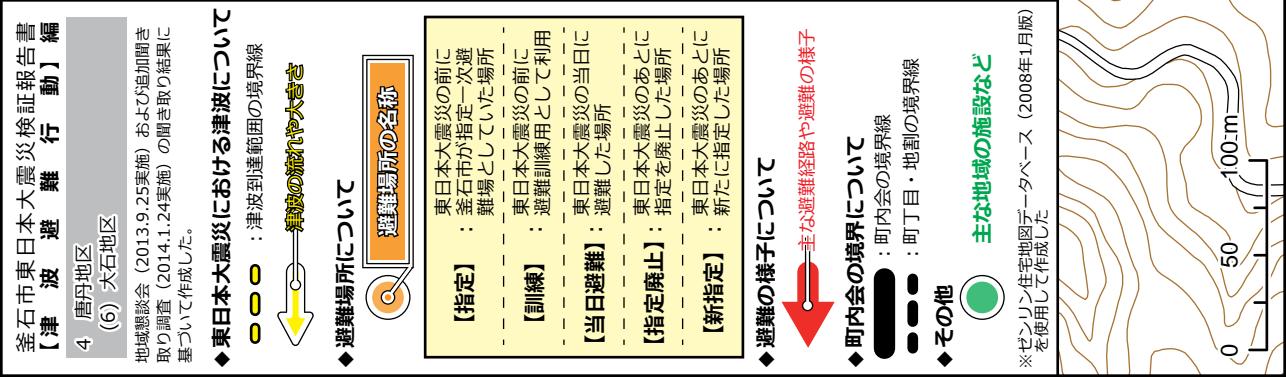
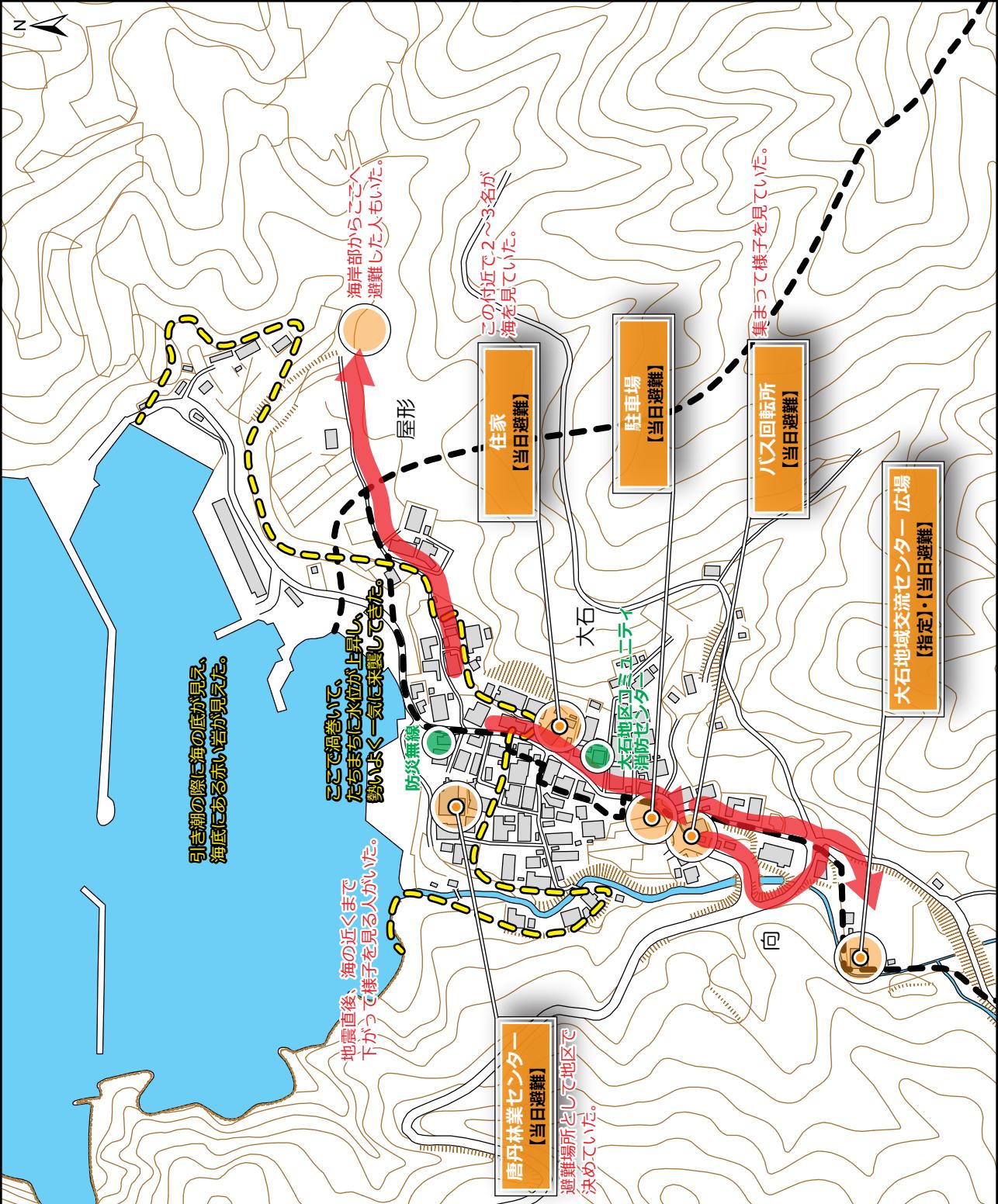
- ・地域の住家は、海に向かった傾斜地に段々の石垣の上に築かれており、地形上、津波が平地のように急激に襲って来る状況にはなかった。そのため、海の様子を確認しながら避難した。
- ・体が不自由な方で家族と同居していた方がいたが、まさかここまで津波は来ないだろうとの思い込みがあり、避難しなかった。津波が襲来する直前、住民が危機一髪、車で救護した。
- ・高台に駐車場や空地があり、住民の多くは車で避難した。

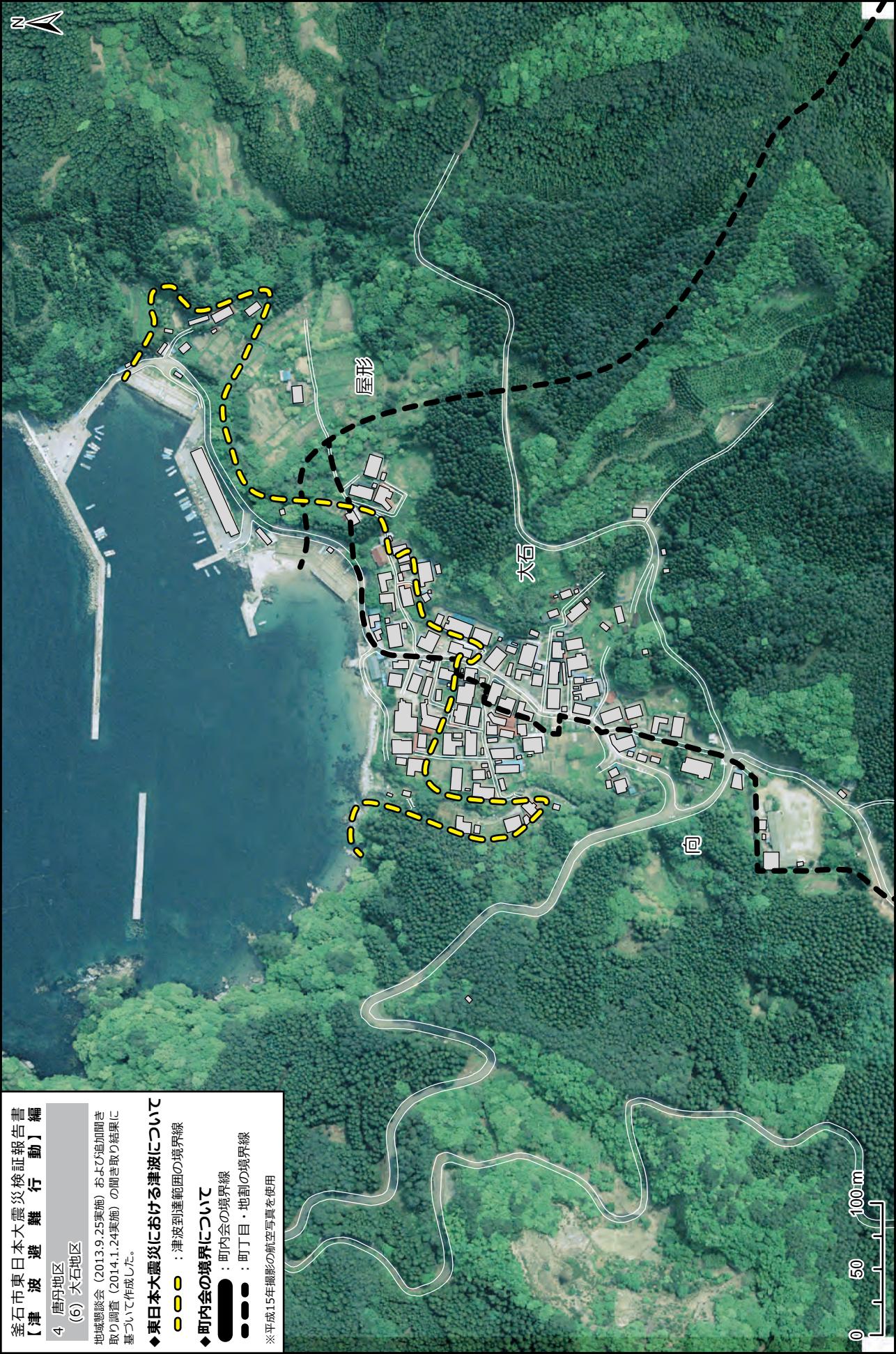
##### 3) 震災以前の備え

- ・3月3日の避難訓練では消防、町内会を中心に参加を呼びかけ、多くの住民が参加していた。

##### 4) 問題点・課題の整理







### 3. 地域の避難行動実態のとりまとめ

#### 3.5 地域の避難行動実態にみる津波避難の教訓

各地域の“3.11 東日本大震災の避難行動”と“震災以前の私たち釜石市市民の津波に対する意識や備え”的あり様を検証した結果を踏まえ、今度こそ津波による犠牲者を出さないようにするために、それを教訓として以下のようにとりまとめました。

教訓は、以下に示す前文と4つの項目に分類してとりまとめました。

【前文】地震・津波に備えることは、この地に住む人々の“心得” 海の恵みを享受する釜石の豊かな暮らしを継続するために、いたずらに海を恐れず、市民全員でこの教訓を日頃から心がけ、後世に継承する。

1) 元来、自然是予想外の災害をもたらすもの。

地震・津波に対しては“自分の命は自分で守る”という意識を堅持し、日頃からの備えを怠らない。

2) “命てんでんご”の本質は、互いの信頼。

それぞれが自分の命を守り、それを信じ合えることが、本当の絆。

3) 被災した直後の思いを語り継いでいくことには限界がある。

“避難する”ことを実践し続けることで地域の文化をつくり、それを後世に継承する。

4) いざというときは、想定にとらわれず、最善を尽くし、率先して避難する。

また、4項目のそれぞれについて、【解説】を付け加えています

## 1) 元来、自然是予想外の災害をもたらすもの。

地震・津波に対しては“自分の命は自分で守る”という意識を堅持し、日頃からの備えを怠らない。

- (1-1) 生活の様々な場面を想定し、非常持出品や水・食糧などの備蓄をしておく
- (1-2) 家族や友人などと、様々な状況を想定して津波避難方法を相談しておく
- (1-3) 地域、職場、学校などでも、津波避難方法を話し合う機会を持ち、訓練などを通じて確認しておく

## 〔解説〕

## (1-1)

- ・地震はいつどこにいるときに発生するかわかりません。そのため、非常持出品や水・食糧などの備蓄は、自宅だけでなく、普段の生活の様々な場面（例えば職場など）を想定し、そこで必要となるであろうものを考え備えておきましょう。
- ・東日本大震災の際には、非常持出品を用意していたにもかかわらず、大きな揺れに動搖してしまい、それを持って避難することができなかった方もいたようです。準備しておくだけでなく、定期的に保管してある場所の確認や地震が発生した際の対応を考えておくことが必要です。

## (1-2)

- ・東日本大震災のように、地震は自宅で家族と一緒にいるときに発生するとは限りません。そのため、日頃から家族や友人などと、通勤や通学の途中、家族が別々の状況にいるときなど、様々な状況を想定して、安全な避難場所を考えたり、避難経路を確認したりしておきましょう。
- ・東日本大震災の際には、地震発生後、家族の様子を確認するために、外出先から避難せずに帰宅してしまったため、危険な目にあったり、津波に流されてしまった人も少なくありませんでした。

## (1-3)

- ・自宅以外の場所にいるときに地震が発生する場合もあります。そのため、家庭だけでなく、地域、職場、学校など、様々な組織や単位で、日頃から津波避難方法を検討するとともに、訓練を通じて、しっかりと確認しておくことを定期的に実施していくことが必要です。
- ・なお、避難訓練を実施する際には、実際に災害が発生した場合と同様の状況を想定することが必要です。「訓練のときはこうするけど、実際に災害が発生した場合には違う」という対応はすべきではありません。
- ・東日本大震災の際には、津波で犠牲となつた方の中に、震災前に避難訓練に参加していなかつた方が少くないようです。避難所では、犠牲者が確認されると、「あの人、避難訓練に参加したことなかったな」といったような会話もあったそうです。
- ・また、事前に避難方法を検討し訓練をしていた企業では、地震発生後すぐに従業員みんな高台へ避難することができた一方で、それらの検討を行っていなかつた企業では、従業員が帰宅途中で津波に流されてしまったケースもありました。
- ・そして、市内の小中学校、幼稚園などでは、震災以前から防災教育や避難訓練を実施していたため、甚大な被害を免れることができました。

## 2) “命てんでんご”の本質は、互いの信頼。

それぞれが自分の命を守り、それを信じ合えることが、本当の絆。

- (2-1) 家族が別々の場所にいるときに地震が発生したとしても、お互いに「一人でもちゃんと避難しているはず」と思えるような家族間での信頼関係を構築しておく
- (2-2) 学校や会社などとも、日頃から地震発生時の対応を相談しておくことで、津波避難に関する信頼関係を構築しておく

## 〔解説〕

## (2-1)

- ・東日本大震災は、平日の日中に発生したため、家族が別々の場所にいる状況で地震に遭遇した人も少なくありませんでした。そのような方の多くが、家族や自宅の様子を見に、外出先から帰宅していました。そして、その途中や帰宅後に津波に遭遇し、犠牲となったり、命の危険を感じる経験をしたりしていました。
- ・このように、大きな地震の後に、家族の安否を心配し、できることなら様子を見にいったり、助けにいったりしたいと思うのは、ある意味では当然の感情です。しかし、その行動によって津波犠牲者がでてしまうこともあります。
- ・そのため、今後は、日頃から家族で津波避難方法についてちゃんと相談しておき、たとえ家族が別々の状況で地震にあったとしても、お互いに一人でもちゃんと避難する、避難しているはず、という信頼関係を構築しておくことが必要です。

## (2-2)

- ・東日本大震災の際には、学校や幼稚園、保育園に子どもを引き取りに行く保護者もいました。
- ・そのため、学校や園は、子どもを預かっているときに地震が発生した場合には、彼らの身の安全をしっかりと確保することができるよう、日頃からしっかりと備えておくとともに、家庭からも信頼されるようにしておくことが必要です。
- ・同様に、企業と家庭についてもいざというときの対応について信頼関係を築いておくことが必要です。

## ※“命てんでんご”

## 1) 名称(呼び名)について

東日本大震災以後、一般的には“津波てんでんご”と言われることが多いようですが、震災以前から釜石市に伝わっていた呼び名には、“命てんでんご”の他に、“命てんでん”、“命てんでっこ”、“命てんでんっこ”や命を付けずに、単に“てんでんご”などと言われていました。このように様々な呼び名があったことを踏まえた上で、本教訓(案)では、“命てんでんご”を統一して用いることとしました。

## 2) 意味について

“命てんでんご”にはたくさんの意味が込められています。「津波襲来時には、一家全滅を免れるために、家族のことも構わずに、てんではばらばらに逃げろ」という種を絶やさぬための地域の非常な掻として伝えられたり、津波によって家族を亡くし、一人生き延びてしまった方や、津波襲来時に逃げ遅れた家族を助けに行こうとする方を慰めたり制止したりする言葉「津波のときは“てんでんご”、仕方なかったんだ」として伝えられてきました。また、“命てんでんご”は、「てんではばらばらに逃げる」という点だけをとらえ、高齢者などの避難困難者の支援をあきらめる、という意味で解釈されることもあります。このように様々な意味、様々な捉え方があることを踏まえた上で、本教訓(案)では、「いざというときに家族のことを心配してしまうのは当たり前だからこそ、普段からてんではばらばらに避難することができるようにしておくことが必要」という立場で教訓をとりまとめました。

## 3) 被災した直後の思いを語り継いでいくことには限界がある。

“避難する”ことを実践し続けることで地域の文化をつくり、それを後世に継承する。

- (3-1) この度の被災経験だけでなく、過去の全ての津波の様子や津波避難のあり方を後世に伝えていく
- (3-2) 語り継ぐだけでなく、「揺れたら逃げる」という行動をとり続ける
- (3-3) たとえ避難が必要なほどの津波が来ないことが何度続いたとしても、繰り返し避難する

## 〔解説〕

## (3-1)

- ・東日本大震災の際には、過去の津波の様子を聞いていた人やチリ津波を経験した人の中には、「ここまで津波は来ない」、「津波はゆっくりと水位が上がっててくる」など、過去の津波襲来時と同じような津波が来ることしか想像することができなかった人もいたようです。そして、そのために十分な避難を行わず、津波に流れたり、命の危険を感じる経験をされた方も少なくありません。
- ・そのため、この度の経験を後世に伝える際には、東日本大震災時の様子だけでなく、それ以前に起こった過去の津波の話もするなどして、話を聞いた後世の人たちが、「津波とはこういうもの」という固定概念を持たないようにし、「相手は自然、何が起こるかわからない」ことを伝えることが必要です。

## (3-2)

- ・明治や昭和の津波を経験した先人たちは、後世に同じ経験をさせないために、当時の様子や津波からの避難のあり方を言い伝えてきました。しかし、その言い伝えは、3.11 東日本大震災が発生した当時、どれほどの釜石市民にちゃんと伝わっていたのでしょうか？
- ・大震災を経験した私たちは、被災直後の今、後世にこの経験や教訓を言い伝えていくべきと考えています。しかし、先人たちがそうであったように、その思いだけでは、次の津波が襲来するであろう次の次の世代まで経験や教訓を正しく言い伝えていくことには限界があるのではないか？
- ・そのため、今後は、この度の経験や教訓を次の世代に語り伝えていくだけでなく、今からできることとして、「揺れたらすぐに高いところに避難する」という行動を実践していくことが必要です。

## (3-3)

- ・地震が発生し、揺れを感じたときに避難していたとしても、多くの場合は被害が生じるような津波は襲来しないでしょう。この空振りを繰り返すことで、震災以前の私たちは、警報が発表されても「どうせ大きな津波はこないだろう」と思うようになってしまっていたのではないか？
- ・しかし、避難の空振りに負けずに、私たちが“避難する”ことを実践し続けることで、次の世代には、この行動が「当たり前」になり、ゆくゆくは釜石市の文化となります。言葉だけでなく、行動を引き継いでいくことで、津波避難のあり方を継承していくことが必要です。
- ・また、「揺れたらすぐに高いところに避難する」という行動をとることが当たり前となるような社会の仕組みをつくることも必要です。例えば、小中学校における防災教育などです。これを継続していくれば、将来の釜石市市民は全員津波防災について教育を受けた人になります。継続することが地域の文化をつくることにつながります。

- 4) いざというときは、想定にとらわれず、最善を尽くし、率先して避難する。
- (4-1) 大きな揺れを感じたり、津波警報が発表されたら、とにかく高いところへ避難する
- (4-2) 揺れの大きさや予想津波高さ、過去の津波浸水範囲やハザードマップなどの情報から「ここまで津波は来ない」などと勝手に判断しない
- (4-3) 避難する際には、周辺の人同士、声をかけあいながら避難する
- (4-4) 避難の呼び掛けを受けたら、素直に呼び掛けに従って避難する
- (4-5) 避難の途中で、自宅や家族の様子を見に行くなどの寄り道をしない
- (4-6) 渋滞に巻き込まれ、避難が遅れてしまう可能性があるので、徒步による避難を原則とする
- (4-7) 一度高いところへ避難したら、津波が来なくなるまでそこから動かない

## 〔解説〕

## (4-1) &amp; (4-2)

- ・東日本大震災の際には、過去の津波の浸水域や事前に公表されていた津波ハザードマップ、そして、地震発生後に発表された「予想津波高さ 3m」や湾口防波堤の存在などから、「ここまで津波は来ない」と判断し、避難しなかったり、避難が遅れてしまったりして犠牲となつた方もいます。
- ・そのため、「相手は自然であつて、どんな津波が来るのかはわからない」ので、大きな揺れを感じたり、津波警報が発表されたりしたら、とにかくすぐに高いところに避難するようにしましょう。

## (4-3) &amp; (4-4)

- ・避難するかどうか迷っていたり、自宅にとどまっていたりした人の中には、近隣住民からの避難の呼び掛けや「津波がきたぞ」という声を聞くことで、避難することができたという人がたくさんいました。
- ・その一方で、隣人が避難の呼び掛けにきてくれたにもかかわらず、それに従わず、避難の呼び掛けをしにきてくれた人とともに、津波に流されそうになってしまった人もいました。
- ・そのため、避難する際には、隣近所みんなで声をかけあうようにしましょう。また、避難の呼び掛けをうけたら、素直に従って避難するようにしましょう。

## (4-5) &amp; (4-6)

- ・東日本大震災の際には、直接高台へ避難せず、自宅の様子や家族の安否を確認に行つてしまつたために、被災してしまつた方も少なくありませんでした。
- ・さらに、避難する際や自宅の様子等を見に行く際に、自動車を利用した人の中には、渋滞に巻きこまれ、津波に流されてしまつた方も少なくありませんでした。
- ・そのため、避難する際には寄り道をせずに高台へ避難する必要があります。その際には、車を利用することを控え、原則として徒步で避難することが必要です。
- ・そして、自動車を利用しなければ避難することができない人がいる場合には、普段から地域で津波避難時の自動車利用方法について検討しておくことが必要です。

## (4-7)

- ・また、一度高台へ避難したにもかかわらず、第一波到達後に自宅や家族の様子を見に戻つてしまい、そこで被災してしまつた方も少なくありませんでした。
- ・そのため、今後は、一度高台へ避難したら、津波が来なくなったことが確認できるまで、その場所にとどまり続けることが必要です。

